

## 南方（その他）

満州からパラオまで

栃木県 佐々木 由一郎

私は、昭和十八年二月十日宇都宮第十四師団歩兵第五十九連隊要員現役兵として、宇都宮歩兵第六十六連隊補充隊第五中隊に入隊した。同年三月十日第七中隊に編成がえとなり、同二十三日屯営を出発した。

入隊して十三日、一応兵隊として、内務班における規律、整頓、上官に対する礼儀作法等々、軍人としての心得なるものを教育され、また、野外における必要な事柄、兵器の手入れと取扱ひ、名称、基本体操の目的と軍事諸般に対する必要性等の訓練と教育も合わせて受けた。

この十三日間のうちで理解の出来なかつたことが一つあつた。それは毎日三度ずつ出る食事のことである。最初は我々の入隊を祝して赤飯をたいてくださったものと皆喜んで食べたのであるが、在隊中の十三日間一度もかわることなく、赤飯が続いたことである。

はじめはさほど気にもせずに食べたが最後には腹のなかがおかしくなつてきて、下痢をおこす者も出てきた。

よくよくその赤飯をみると、餅米は一粒も入れてなく全部うるち米でそのなかにあずきをまぜてたくだけの飯で、あずきと米を一緒に煮るため皮のかたいあずきがよくにえていないので消化せず下痢をおこすことになつたのである。普通の赤飯は、さきにあずきを完全ににておいてたくときにまぜるのであり、しかも米は粳米でなく

て糯米を使うのである。それが、一緒にたいて十三日間も同じ物を食べさせられて、いくら元気な若者といい、これにはまいってしまった。

これもあとになって気づいたのであるが、すでに政府は、戦争の長期化にそなえて食料の備蓄を始めていたと  
のことである。

そして、二度びっくりしたことは、汁の実であった。

我々が予想も出来なかった物が汁の実として使われていた。それはあの鬼怒川のほとりや、沼地、川の流れの悪い所に繁殖している「タカナ」という一種の野草であった。いかに野菜が不足をしている、いかに大量に必要であっても、今、戦地に向かおうとする若者の体力を養成しなくてはならない時、あまりにも情け無く、またそのみじめさを感じざるをえなかった。戦時体制化とはいえ、戦争は始めたばかりというのに国家の内政に少なくとも不安をおぼえざるをえなかった。

もう一つ信じられないことがあった。その汁の「タカナ」にまじって食べることの出来ない「イモリ」がまっぶたつに切られて腹わたを出してにこまれ、それが汁藕

に盛られていたのである。「イモリ」というのは「イモリ」科に属する両棲類で池や沼等にすむ背中黒味がかつた茶色で、腹は赤くて黒色の斑紋があり、一見すると「トカゲ」の変色したような、いかにもグロテスクな格好の生き物であり、さわるると一種独特のいやなおいがしてとても食べることも出来るものではない。ここで私は軍隊の炊事というものはあまりにも無責任で、不衛生きわまりないものであると腹の立つ思いで、その後はなにも食べたくなく、神経質となり、訓練には身がはいらなくなってしまった。

そのようなことが続いているうちに十三日間が過ぎて、いよいよ外地に立つことがきまった。そして何日かまえに、古年兵達から聞かされていた面会の日が来た。その日になって班長から面会時間と面会時の心得等いわれて、おのおの定められた場所にいき、出征以来日は浅いが両親、兄弟、親戚、友人と逢い、限られた時間だが、語りあった。そして皆さんが心をこめてつくって来てくれた食べ物に舌つづみを打った。饅頭あり、ぼた餅あり、大福あり、どれをとっても皆好物ばかりで、なに

から食べてよいか手あたりしだいほぼばった。ときおり巡察の下士官がわかるがわる廻っては来たが、その目を盗んで腹一杯食べた。考えてみますとその頃はすてべての物が統制され、とくに砂糖等の調味料等は自由にはまかなえない時期になっていたので、饅頭やぼた餅等はなかなかつくれなかったのである。聞くところによると親戚の人たちが、知りあいの人に頼んで八方手をつくし、この日のために探しもとめて心をこめてつくって来てくれたのである。このことを聞かされ自然に熱い物が頬を伝わり流れ落ちていた。

持参して来て下さった物を味わって、よもやま話に花を咲かせているうちに限られた時間ではあったが、面会時間は刻々とせまり、最後に再度両手を固く握りあって元気でご奉公出来るようはげまされ、多忙のなかわざわざ面会に来て下さった皆様方に御礼と無事を祈ってお別れしたのである。あのとときの田舎饅頭やぼた餅の味は一生涯忘れることが出来ない。

それから三日後、故郷の山々を拝しながら屯宮を出発したのである。いづれこうなることは覚悟していてもい

ざということになると気が落ち着かぬものである。出発にさいしてはなんの予告もなく、誰に話す時間もなく、しんしんと進められたのである。

その当時は軍の行動は、軍の機密事項として発表はされないことになっており、その時点にならないと知らせなかったらしいのである。しかし、知らないのは我々兵隊だけで宮門を出ると、早朝というのに誰に聞いたのか、市内の人たちはめいめいに日の丸の小旗を持って沿道をうめ、万歳を叫びながら我々を駅まで送ってくれた。

親も兄弟も知らないで見送り等はないと思っていたのに、こんなに多数の見知らぬ人たちの早朝からの見送りに対し、戦友たちと言葉はかわさなかったが、目と目をあわせて有難うと感激にむせび、自然と目頭が熱くなり、心のなかで御礼を申しあげ、頭をさげるだけであった。そして、宇都宮駅から汽車に乗って下関に向かった。

二十四日、下関に着き同日下関港を出港し、同日釜山港に上陸。

すこし前後するが、出発にさいしては我々初年兵を原

隊の満州国龍江省チチハル歩兵第五十九連隊から迎えに来てくれていた。教官の須藤國雄少尉と勝呂忠一軍曹、小林公明軍曹、堀添正雄軍曹の四人の指揮下にはいった。須藤少尉は、我々が一期検閲が終わるまでよき教官として一人前の軍人に仕上げてくれた人で、親とも兄ともおしたいの出来る人であった。

師団が南方方面に転進。その時点で中尉に昇進して第二大隊の副官として、また大隊の名参謀として活躍した。私は、須藤教官がチチハルから迎えに来た時から指名を受けて身のまわりの世話役（当番兵）を命ぜられ一期検閲が終わるまでおつかえした。

転進にともなうて部隊の編成がえもあり、我が八中隊の仲森玲四郎中隊長が第五十九連隊の第二大隊長となり、よき中隊長と、よき教官を一緒に失ったわけであるが、我々と大隊は同じであるので毎日のように顔をあわせることが出来たので、この点非常に力強かった。

また勝呂、小林両班長は我々が南方方面に転進する前に他の部隊に転属となり、その場所等はさだかではないが、両者共壮烈な戦死をとげた後、後日、中隊長より聞

かされ、何も知らず入隊してから一人前の兵隊になるまでしんみのお世話をいただいた両班長殿にあらためて哀悼のまことを捧げたのである。

釜山に上陸して三月二十七日鮮満国境（安東）を通過して同月二十九日満州国龍江省チチハルに到着、同日歩兵第五十九連隊第八中隊中森隊に編入となり、同日より同地付近の警備に着いた。そして、約一年間北方のままとして大陸戦にそなえて徹底的な教育と訓練を受けた。冬は冬期訓練、とくに雪中行軍に、夏は渡河訓練に、秋は秋季演習として大興安嶺突破演習とやすむひまもなく訓練された。いずれもソ連にそなえての教育であった。

そして、八月十日陸軍一等兵に進級してあわせて兵精勤章を授与され、上等兵候補者として任命を受けた。これでようやく一人前の兵隊になれたと一人その喜びをかみしめたのである。

それから半年、昭和十九年一月十日、二度目の兵精勤章を授与され、同年二月十日、入隊して丁度一年目にして陸軍上等兵に進級、二度目の喜びを味わった。そして、

同月同日第十四師団に動員下令、編成改正となり、三月二日第五十九連隊第五中隊に編入されて、三月十三日チチハルを出発、同月十五日関東州界を通過して同日旅順に着き、ここで四隻の輸送船に兵器、戦闘用物資を船積みして、同月二十八日大連港を出港した。

同月三十一日門司港にはいり、四月一日門司港を出発し、同月三日横浜港より千葉県館山を経由、小笠原諸島父島港よりいったんは出航したが、敵の潜水艦の出没がはげしく進行ができず、十数日間父島に足どめされた。

同月十八日父島港を出航して同月二十四日南太平洋西カロリン群島、パラオ島に上陸した。チチハルを出発して四十日目、小笠原諸島父島を出航して六日目ようやく目的地についたのである。

我々は大連を出発して目的地パラオに着くまでどこへ行くのか、なにもわからず知らされず、人まかせ船まかせであった。ただ、大連を出航するとき夏物の衣服が支給されたので南方方面ということだけを我なりにさとっただけで、上陸してはじめて目的地がわかったわけである。

昭和十九年四月頃となるとすでに南方方面のいくつかの島は玉砕をしており、戦況はすでにわれに利あらず、きびしい状況下であり、制空権、制海権もすでに敵の手中にあった。そして、わが方には飛行機はなく、船もなく南方海上等においては手も足も出ない状況であった。

このようなときに、第十四師団の大兵団が大船団を組んで航海するということは無謀にひとしいことであったが、世には奇跡ということがあがるが、まさに天佑というほかはなく無事に目的地に着いた。航行中、海上は昼夜の別なく敵の潜水艦の攻撃を嚴重に警戒し、こうたいで対潜看守班を編成して、発見者には二階級特進という恩典までがつけられたのである。また我々船団も輸送船からときおり爆雷を投下して潜水艦が近ずかないよう、これを防いで進んでいった。監視は一時間こうたいであったり、とくに性能のよい双眼鏡をあたえられ、兵隊も真剣そのものであった。もしおこたって魚雷をみのがせば全員が海のもくずと消えることになり、これこそが一生とりかえしのつかない悔いをまつだいに残すことになるので、その責任感から軍人としての本分を尽くしたと思

う。

乗船にあたっては、一坪あたり十一人の割合でつめこまれ、船内はきわめてきゅうくつで、身動きもできないありさまであった。輸送船は四隻で「東山丸」八七六六屯、「能登丸」七一九一屯、「阿蘇山丸」八八一二屯、「三池丸」一万一七三八屯。護衛艦が「帆風」「臯月」「笠戸」の三隻であった。「東山丸」には我が第五十九連隊が乗船した。「能登丸」には水戸の第二連隊が、「阿蘇山丸」には高崎の第十五連隊と師団司令部および師団直轄主力部隊が乗船し、「三池丸」には兵器類、食糧等その他の必要物資が積みこまれた。

パラオ港には我々が上陸をする約一か月前の三月二十九日から三日間にわたり、米海軍機動部隊の空と海からの攻撃を受けて、我が日本海軍連合艦隊の艦船大小あわせて三十六隻が破壊され、そのざんがいがあわれな姿でよこたわっていた。南方の美しい島にはあまりにもふにあいな格好であった。

パラオ島は、東京から約三千八百キロ、フィリピン、ミンダナオ島東方約八百キロのところに位置して大

小合わせて約百余の島からなり、面積約四百七十八平方キロで、人口は約三万三千人が住んでいたという。パラオ本島南端のコロールには南洋庁（大正十年におかれたということである）が置かれ、またパラオはニューギニア方面への中枢基地でもあった。島民はカナカ族がほとんどであり、日本人も比較的多く（約二万五千人）が住み、主として農業に従事していた。水産物もゆたかであかつお節の生産加工、真珠貝の養殖等々が盛んにおこなわれ、沖縄県の人たちの来島者も多かったようである。

気候は赤道に近く四季の区別がないとこなつの国で、海洋気候であり一日の最高気温が二九度から三〇度ぐらいで、最低の気温も二四度でいどその差は少ない。降水量も三千七百ミリでいど（日本の約二倍ぐらゐ）、ほとんど毎日スコール（日本でいうにわか雨）がふり、その炎暑もやわらげられるので、割合に住みよいところである。

四月二十四日パラオ島マラカル波止場に上陸し、揚陸作戦がおわり、マラカベサン休宿後、四月二十八日軍旗を先頭に大発（大型）二十隻に乗船して新任地アンガ

アール島（玉砕の島）に前進したのである。灼熱の太陽のもと抜けるような南の海の間をこえ、ペリリュー島を過ぎるころ、特殊な三角波にもまれながら無事アンガール島に到着した。アンガール島はバラオ諸島の最南端でペリリュー島から南へ約十一キロはなれて南北四キロ、東西に三キロで、北西部の高地の標高六百メートルをのぞいては平坦で、島全体が珊瑚礁のりゅうきによりけいせいされた石灰岩の小島である。磷酸鉍物は豊富で埋蔵量は百七十万屯といわれ、移出量年間七万屯もあつた。それで、平和時には、日本は相当量輸入したとのことである。

アンガール島の当時の人口は約二千六百人で（内邦人が千三百人）をかぞえたといわれていた。住宅は主としてサイパン村にあつたようである。南部地域はヤシ林で東南はジャングルと湿地帯で、北西高地は鋸状の珊瑚礁の絶壁で樹木が繁茂していて行動には不便であつた。ただし鍾乳洞が多くあつて洞窟陣地にはさいてきであつた。この島には川がないので飲用水は雨水をたくわえて使用した。貯水槽には常にボーフラがわいて、そのボー

フラが浮いたり沈んだりして、使うときは貯水槽のへりをおさえて、ボーフラがなかに沈んだときにくみとり利用していた。

上陸してただちに配備につき、島名を日本人らしく「安島」と名付けられたが、大東亜戦争中もつもと熾烈苛烈な戦場となつたのはまことに皮肉なことであつた。またその他の島内の地名も前任地にちなんで「鬼怒岬」「二荒山」「那須岬」「興安岬」と郷土になじみの深い名がつけられた。そして、すべての地域は敵の上陸に際しては水際にせんめつするため、全島を要塞化する陣地構築をおこなつた。そのため灼熱の太陽のもとの陣地構築にふじみの努力をおこなつた。あらゆる地形地物を利用して洞窟式の陣地、水際障害物のこうちく、とくに石よりかたいといわれる珊瑚礁のくっさく作業は困難をきわめた。「ダイナマイト」もうまくきかず、真つ暗になるまで作業をした。豆だらけ、血だらけの手をして宿舎に帰る日もたびたびあつた。

アンガール島の植物は、椰子、バナナが若干あつたが、パイヤは比較的多く生えていて、ときどきその熟

した実を食したこともあった。動物は、トカゲ、ヤドカリ、ねずみ、蟹、野鳥がおり、蚊や、蠅もうるさいほどいた。風土病のデング熱にはほとんどの兵隊がかかったが、マラリヤ等には皆かからなかったのはさいわいであつた。

そのような環境のなか、準備を進めている内に六月八日にはじめて敵の大型機B 29がペリリー島をおそつたのである。我々もその時点で敵の来襲、上陸を予想し、いまだ未完成である陣地ごうちくに精根をかたむけたのである。そして、七月二十六日午前六時、朝の点呼、朝礼がおわらぬうちに敵の航空母艦より発進してきたグラマン艦載機が十数機、低空飛行で銃爆撃をしてきた。兵隊も皆はじめての体験のため一時的にはろうばいしたが、ときがたつにしたがつて生気をとりもどし、各々配置につき対空戦をおこなつたのである。

数十分の応戦で飛行機は去り一息入れて海上をみると、今度は敵の潜水艦が浮上して艦砲射撃を開始した。さては、今度はいよいよ敵は上陸を開始してくるのかと対戦の用意を進めているうちに、いつのまにか潜水艦は

姿を消し、平静なものと海にもどりあんどした。見渡すと艦砲射撃のあとと爆弾のあとがなまなましく残つたのである。応戦した兵隊の顔も皆青ざめていて、なにか落ち着かぬものであつたが、しばらくして我に戻り元氣を取り戻した。

初戦ではあつたが、皆勇敢に応戦し、敵機二機を撃墜した。我方にも二十人近い戦死者をだした。そのような状況のなかで我々第五十九連隊は軍司令官の作戦命令により七月二十九日「安島」に一個大隊を残し、パラオ本島にもどり警備することとなり、軍旗と共に、当初上陸した本島に転進した。

チチハルを出発以来死ぬ時はもろとものと、生死をちかいあつた戦友と水盃をかわし、お互いの武運を祈り再会を約し、しっかりと抱き合い、かたい握手をして別れを惜しんだ。このとき誰がこの戦友たちと永遠の別れになることを予測したであろうか。いかに戦争といえども、我々には作戦とか、戦略等というものについてわかるよしもないが、こんなあずき粒ほどの小島に多大な人命を犠牲にして、ばくだいな戦費を投入してなんの利得

があるのか理解に苦しむものである。

我々が命により本島に転進して四十九日目の九月十七日午前五時三十分、猛烈な艦砲射撃ののち、大型輸送船から上陸用舟艇がおろされて上陸をかんこうしてきた。

「安島」警備にあたった我が戦友たちは勇敢に戦い、一度は敵を後退させたが、すべてにまさる米軍は午前九時頃になって上陸に成功した。そして、十月十九日、一か月あまりにわたる激しい戦闘ののち、全員壮絶な玉砕をとげたのである。わずか一個大隊の兵力で米軍の強力な火力と二個師団もの敵を相手に一か月余も戦ったということは、大東亜戦争のなかでもまれにみるものであり、いかに優秀な軍隊であったか語るまでもない。ここに亡き戦友の霊に対し哀悼のまことをさげ、冥福を祈るものである。

## 私の体験記

山口県 小川 佳男

昭和十七年十月一日、現役兵（甲種合格）として入営することがきまった。私の町内に天満宮があった。町内の人達が境内に集まった。私は、皆の前で「行って参ります」と挨拶した。送別者の列は駅まで行進した。駅からは役場の兵事係が山口の歩兵第四十二連隊（当時西部第四部隊とっていた）へ引率してくれた。私は正面の兵舎の七中隊へはいった。

二等兵の教育は、どの隊も皆同じだ。毎日がビンタの連続であった。考えてみると人殺し業の教育だからこの方法が戦争要員養成には一番簡単だったとも思われる。兵舎には南京虫が多く、はじめは大変なやまされた。私の初年兵教育は軽機関銃だった。したがって、私には軽機と小銃の保管と手入れがあったため、ビンタの原因がしばしばおこった。親にもなぐられ経験がないのに、毎